

UFOと宇宙哲学の研究誌

# コズミック ニューズレター

NO. 43



日本GAP

コズミック・ニューズレター

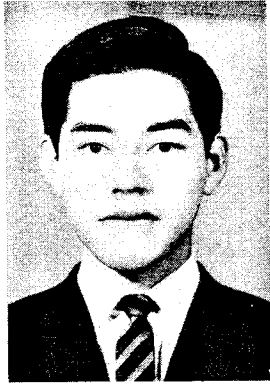
1970年・第43号目次

私は円盤を映画に撮った	斎藤雄久	1
シャトー・ド・マルタンの奇怪な夜	ジャンクロード・パヨン	5
トピックス		8
オラバリアの不思議な事件	ゴードン・クレイトン	9
ポリビヤの兇暴な怪人	オスカー・A・ガリンデス	11
質疑応答		15
なぜ彼らは来るのか(2)	フレッド・ステックリング	20
大阪支部大会盛況裏に終了		30
<予告>昭和45年度日本GAP総会開催		31

\*表紙写真は本号記事「私は円盤を映画に撮った」の筆者  
斎藤雄久君が富士山五合目で8ミリ撮影機を手にして円  
盤をねらっている光景。左は同行した証人のI氏。

## 私は円盤を映画に撮った

斎藤雄久(かずひさ)



斎藤雄久君

この度久保田会長より直々に原稿をとる様御指名にあずかりまして、誠に恐縮ながらこんな私が書かして頂けることを本当に光栄に存じる次第です。残念なことに私は他の方の様に文章をすばらしく記すという才能にめぐまれておりませんが、十分に皆様に御理解頂けたらと願ってやみません。とにかくこうして書かして頂けることを恐縮に感ずると共に、与えられた使命を喜んで御受けたいと存じます。

実は、先日私は巽先生に御会いいたしました折、久保田会長が大阪GAP支部大会に参加されるので、ここで、せっかく東京からみえたのだから、体験と意見をテープに吹き込み込む様御依頼を受けまして、早々御依頼に応じ吹き込みましたことが縁となりまして、こうして体験談を書かして頂けるという光栄にあいなったわけです。

これから未熟ながらも私の体験と所見をかいつまんて書かせて頂きます。

私が空飛ぶ円盤に深い意味も判らざりに関心を持ち、甚だ興味を覚えましたのが十三才頃だったと記憶しております。この頃はまだ空飛ぶ円盤なるものの深い理解は身についておらず、ただ少年雑誌とかそういういたぐいの雑誌から学んだ？概念しかなかった様です。

しかし小さい頃より「人間はどうして生きているのだろうか？自分は何ぞ存在するのだろうか？もしこの世の一切のものがなくなつたら、自分はおるか、全てはどうなるのだろうか」といった様な事を深く考え、いろいろ空想などにふけておりました。この考えは大きくなるにつれて益々つのるばかりでした。それからそうこうするうちに、中学一年の頃、たまたまた夕方の散歩で途中立ち寄つた書店に「空飛ぶ円盤の真相」という本が目についたのでした。

これは一風変わった本だと感じながら立ち読みしました所、それがないと非常に私に今までに思っていたことに対する究明と解答がなされているではありませんか。仲々すばらしい内容であることに驚き、すぐ購入したわけです。これがア氏の本を知ると同時にア氏の存在を知るきっかけとなったのです。

こうして次々に「空飛ぶ円盤同乗記」「空飛ぶ円盤実見記」「レバシー」とを揃えたのです。

しばらくして、私は空飛ぶ円盤を是非この目で一度見てみたい、出来るなら飛来してきてほしいと考え続けるようになりました。

それから毎晩定期的に三十分から一時間にかけて観測をすること約一週間続けました。しかし毎晩、現われてくれる様に念じながら観測を続けていたにもかかわらず、一向に出現する気配はありませんでした。ただときたませいぜい流星が飛ぶ位でした。

これはもうだめかと半ばあきらめていた折、たまたま「実見記」

中にア氏が雨の日も曇る日も風の吹く日も毎晩忍耐強く観測を続けたとある体験が目につれ、それに刺激かつ感銘をうけて、再び一週間観測を続けたものです。その時の私の心境は、必ず今度は見られるだろうという確信に満ち溢れておりました。さらにア氏でさえあの様に努力したとあるのに、この私如き少年が挫折してはならじと思っております。それから一週間目、最初からかぞえて二週間目に当るのですが、その日の夜七時半頃だったでしょうが、南東の空に待望の円盤が一機出現しました。それは青味がかつた色で、大きさは月の二分の一位で、南東から東へとゆっくりむかっていました。最初の頃、私はそれが円盤なのかそれとも人工衛星のたぐいなのかはなはだ疑問に思っておりましたが、心でそっと「円盤ならばぜひハッキリ証明してほしい」と念じるや否や、その物体は急に今までの平行な動きからジグザグ運動に変わり、色もそれまでの青味がかつた色からオレンジ色に変化してました。ジグザグ運動を始めた円盤はそのまま急にターンして上昇して消えてしまいました。この間約一分位だったと思われました。

この日の、しかも初めて目につれたこと、さらに心の疑問に応答するかの様に運動を示してくれた円盤に、私は感激と喜びを味わいました。それは見た者しか体験できないものでしょう。

それから毎晩の様に円盤が出現する様になりました。ある時は、意識的に観測をしていなくとも、なんとなく外に出て上を見たくなり、その方向に目をやると出現するというのがしばしばありました。

中学二年の頃、学校に行く途中、帰る時、遊んでいる際中、よく円盤が出現する様になりました。故意か偶然か円盤が出現すると、

それがまるで何かの予告のようになることがしばしば起きました。最初の頃は気になかなかつたのですが、出現すると何か起きるということと、どうしても離して考えることが不可能になったのでした。一例をあげますと、私がある目的地に出かける前、上空、天頂四十五度付近より、黒く丸い円盤が突然二機出現して、それが降下寸前一つに重なった様になり急に消えたことが有りました。その目撃の日、目的地に着く寸前、車にひかれそうになりましたが。もう一歩という所であわや一命を失うところでした。このような警告がいく多もありました。今思いますのにやはり円盤が助けてくれたのかも知れないと考えております。

さて、そうこう過して高校一年の頃、五月中旬池袋の西部デパート屋上でひるま連続して円盤を三回目撃しました。その晩もつづけて円盤を見ましたが、同年その報告は久保田会長に知らせたという事も有りました。その日はなんと昼夜続けて九回も目撃したのでした。この目撃はなにかを暗示していたのかも知れません。といいますのは、翌月八ミリシネに円盤を撮るという幸運にめぐまれたからです。場所は新宿の自宅から近い戸山ハイッで撮ったのです。これが私の最初の円盤実写シネです。といえますのはこれを縁に次々に円盤をシネに撮っていくからなのです。次はその話に入っていくわけですが……。

さて私がすでにテレビに八ミリシネを公開したのを御存知の方も居られると思いますが、それは、土曜ショー（カラー、今年六月）とNET、アフタヌーンショー（今年七月十四日）の二番組で行なったのです。この時公開しましたシネは八ミリカラーで、これは去年の一月十五日、富士山五合目付近で撮ったものです。

この日（一月十五日）は本来普通ですと、こんな真冬に富士山に行くわけがないのですが、私はいわゆるいう所のテレビパシーらしきものの衝動をうけた様で、「富士山に円盤が四時頃出現するだろう。富士山へ向け。八ミリカメラを持って円盤の飛ぶのを待て」ざっとこんな気分であったのです。そして知人IとMと私を含む三名で、すぐ富士山に車で向かったのですが、見事午後四時ぴったり円盤が出現したのです。この時、肉眼で観測した時は土星型（ボーシ型）の典型的なものでした。八ミリには丸く写っています。特に見事なシーンは雲から出たり入ったりするシーンです。

さらにその時の状況と様子を詳しく記載します。まず、円盤の大きさは目測三十メートル位、色は非常に輝く真珠色の様な白銀色で、途中降下する寸前金色に近く色が変化した様でした。

先にもふれましたが、この日は一月十五日でしたので、五合目までの有料道路が氷と雪でスリップするので、チェーンのない車は一切オミットであるという事でしたが、どうにかこうにか料金所をいわずゆる誤魔化して、ノートチェーンのまま五合目まで向かって行きました。途中スリップの連続で危険な目に会ってきたのですが、絶対的な衝動を受けた限りにおいて、事故は絶対に起きないという確信に満ち満ちていました。案にその通り何事もなく無事であったのです。そして五合目に到着、いよいよ車から降りるなり爆音をたててジェット機が通過していききましたが、その直後ジェット機とは逆に真上から北に降下する円盤をI氏がみつつけ、大声を張り上げて「円盤だ！」と指さしていました。見るとまさに上空真上からゆっくり月の二分の一位の円盤が降下してはありませんか。私は興奮さめやらぬうちに、自動車にもどり、八ミリカメラをセットしま

した。実際には八分位飛行しましたが、八ミリセットの時間、四倍ズームにさらに一・六倍コンバータを付ける時間、フィルムが少量フィートしかなかったことなどが重なって、思う様に全部は撮れませんでした。以上が大体の状況内容です。まだ十分にいいつくせないのが残念でなりません。

この今回のテレビで公開しましたシネだけが円盤を写した唯一のものでありません。過去にもいくつか八ミリに撮っているのですが、私の個人的な圧力、及び社会的な保護を考慮しまして、一切公開はしてきておりません。今回の富士山のシネだけに限りテレビで公開しました。しかし、やはり一年たってから公開したわけです。

写真家のY氏にも八ミリフィルムを一コマ一コマ検討してもらいましたが、「見事に本物であり、トリックは考えられない。特に雲から出たり入ったりするシーンがなによりの決定的場面である」ということです。今後もしらに私は円盤を撮るといふ衝動がわいていきます。今の所八ミリですが、近いうちに十六ミリシネカメラに転向して、最も質の良いシネにしますので、今後はさらに質の良い映画を御見せ出来ると思います。（注||同君は八月に十六ミリシネカメラを入手した）。

出来れば皆さんの中でどなたか私と一緒に撮影に同行出来るようにですね。時間的に縛られない、余裕のいつでも出来る人は一緒に行くかも知れません。私はいつ撮影状態になるかわからないのです。全くその前後に衝動を感じる次第です。

私はいつも思うのですが、円盤を肯定するグループ、フリー、個人がよく争うのを見ますが、（世界的傾向？）、たとい主義主張が異なれどもお互いの人間対人間としての信頼が確立され調和していく

のが本道の道であると思つています。特にグループ同士は対立しがちな傾向をみますが、これこそ明らかに大間違いであると言わねばならないでしょう。円盤肯定者（派）は敵を間違えているのではないのでしょうか？ われわれの敵は、その多くの人々がいう様に、たといそれがどんなものであるが、真実を頭から否定し、円盤を大衆の目から抹殺否定する動きではないでしょうか。

お互いに円盤の存在を肯定するグループ、フリー、個人が争つていては、それこそ敵を間違えているのではないのでしょうか。

しかし否定する人々にも真実をみいだしている人々もかなりいます。私がいうのはこの人達ではなく、円盤の存在を知つていながら暗に円盤研究を妨害する動きをいつているのです（否定する一般人をいうのではない）。

円盤について何も知らないある人が、かつて私に次の様にいったことがあります。「円盤があるないは別として、円盤を肯定する者同士が対立しているのだから、本当に円盤があるのか疑わしいよ」円盤を研究肯定する者は、皆すべて真実を世に問う重大な責任があるはずで（グループ、フリー、個人ふくめ）。

それがかえつてあまりにも円盤界が乱立するあまり、逆に世間の一般人は真実（円盤の存在など）を軽くあしらいます。

かつてある人の言葉に「敵とは自分を誤解する友にすぎぬ」とありますが、今こそ円盤を研究する一大友人は一大団結すべきだと思ひます。敵は円盤啓蒙研究者でもなければ一般の否定する人達でもありません。それを（円盤を）知つていながら真実を大衆から抹殺し、頭から円盤を否定する動きこそ敵であるといえましよう。

私自身、この点におきましても、誰でも素直に受け入れてくれる

方にはシネをお見せしたいと思ひます。

あまり長くなりまますとかえつて御迷惑をかけますので、この辺で筆を置きたいと思ひますが、また何かありました折には、出来ることなら御報告させて頂きます。

最後に、こうして私の体験、所見を述べさせて頂く機会をあたえて下さいました久保田会長に心から感謝をこめまして、御礼を申し上げます。さらに大阪支部総会にテープによる発言の機会をあたえて下さいました巽先生に感謝いたします。

それに私の体験記を読まれるGAP会員各位にごあいさつを申し上げ、筆を置きます。

昭和四十五年九月三日記

編者注 斎藤君は高校在学中にGAPに入会し、その頃から編者とは面識があった。もの静かな風変りな少年だったが、言うことはしっかりしていた。その後同君が奇妙な体験を持ち始めたというニュースがGAP内部で広まるようになった。また同君からも種々の報告が寄せられましたが、編者自身は静観していた。その後同君がS君と共に八ミリの円盤フィルムの数コマを持って篠崎の編者宅へ来たことがあった。この小さな証拠物件は白黒フィルムに撮られた黒い円盤を示していたが、ルーペで子細に検査した結果、トリックではないように思われた。写歴三十年の写真狂で八ミリもかなりやり学校では十六ミリの映写をやっていた編者にとつて、同君のフィルムは実に興味深いものがあった。八月には目撃証人のI氏と共に再度同君が来訪され、問題の富士山円盤映画を見せてもらったが、これは全くすばらしいものであった。来たる十一月八日の総会で公開する予定なので、ぜひ観賞していただきたいと思う。

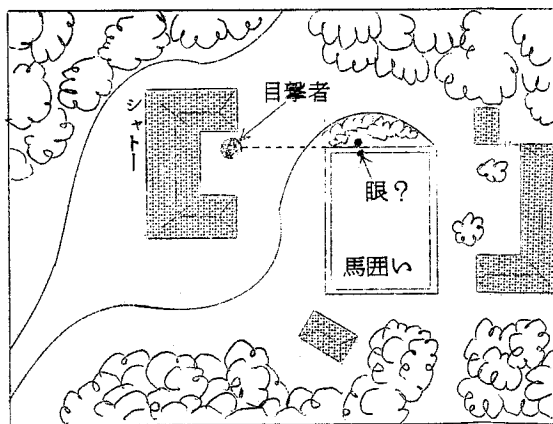
## シャトー・ド・マルタンの奇怪な夜

ジャン・クロード・パヨン

パヨン氏はフランス、ポワチエのセルクル・ダン・フォルマシオン・ド・フェノメヌ・アンソリテ（異常現象研究会）の幹事である。彼の仏語原文はFSR誌幹部ゴードン・クレイトンによって英訳され、それを編者が和訳した（編者）。

一九六九年八月の或る夕方、私はフランスの西中央地帯に位置するポワチエの北東数マイルのビニューにあるシャトー・ド・マルタンに住んでいる義兄を訪問中であつた。二人は全体的に異常な現象特にUFOについて話し込んだ。ところが話しているうちに私の姉が次のように語り出すのである。それより数ヵ月前の或る夜彼女はシャトー公園の馬たちの動揺する物音で目が覚めた。馬たちは駆け出して広場のまわりを走りながら大騒ぎをやっている。この騒ぎは殆ど夜中続いた。彼女が言うところによると、シャトー（注：アパートか？）の管理人メンゴ氏がそのとき公園内に入り込んで、馬を追いかけている何か光る物を見たのだとその妻君が言ったという。これを聞いて私は即刻管理人に詳細を聞きだした。まず始めに私は彼から正確な日時を聞き出すのにいささか困難を感じた。メンゴ氏は日時の記憶をまるで持たないのだ。しかし徹底的な質問に

よって、それは義兄とシャトーの所有者が両方共不在であつた或る夜に起こつたことが確かめられた。こうして問題の事件は冬の終り頃、たぶん二月中に発生したと決定することができた。それは月のない夜で、一九六九年の二月十六日頃に起こつたと思われる。闇夜だつたその夜、管理人は自宅の台所にいた。そのとき馬たちが（正しく言うと牝馬三頭と子馬二頭である）公園の中で走りまわっている音を聞いた。そこで外へ出て、シャトーの階段の頂上の所を数歩あるいたあと、馬たちが全速力で走り過ぎるのを見た。すると彼の注意は激しく輝く一對の目に引かれた。それはヤブと馬囲いの垣のあいだに在るのだ（図を参照）。



馬をおびやかしている奴の正体を見きわめようとして彼はシャツへ引き返して銃を持ち出し、それから（暗黒のためになりに困難があつたが）シャトーの周囲を一巡した。次に再び走り廻っている馬たちを見たが、馬たちは狂つたようなサーカスが続いている。そのとき馬は普段なら脚を傷つける危険のために入らないようなヤブを突き抜けた。ちよつとのあいだ彼は（ほんの瞬間的だつたが）馬たちを追いかけている或る影が存在するという印象を受けた。そこで彼はもし襲撃者がいるのならば、それをおどして追い払おうと空中へ数発発射した。しかし動物たちがまだ落ち着かないのを見て、彼はついにベッドへ帰ることにした。

翌朝（姉がこのことを確認したのだが）馬たちはまだ騒いでいた。馬囲いの垣にかなりの損傷があつたのに管理人が気づいたのはその時である。問題の垣は太いクイで出来たきわめて頑丈なものである。私がそこへ行った時はまだこわれたままだつた。そこで私は十個所以上も打ちこわされたことを自分で確かめることができた。それでメンゴー氏に詳細を続けるように頼んだ。

彼が見た、目、というのには非常に青白くて、特に輝く緑色で、その距離から見えたときすればかなり大きかつたに違いない。フランス植民地部隊にいたことのあるメンゴー氏はこの、目を「トラの目のようだが、非常に輝いていた」と述べている。

われわれがかなり正確にたしかめ得たことは、その、目、は地上約一メートル十五センチ位の高さにあつたということ、すなわち私のベルトの高さ位である。惜しいことにメンゴー氏はその、目、を持つ、未確認、怪物の顔の特徴を述べることができない。というの、は、すでに述べたようにその夜は特に暗い夜で、加うるにその、目、

は公園全体の中で最も暗い場所と思われる所にいた。

私は足跡を求めて公園を探索したがだめだつた。もちろん次の事が銘記されねばならない。すなわち、問題の場所は通常人が殆ど歩かない所で、事件は数ヵ月前に起こつたのだから、足跡その他の痕跡は雨や雪でとつくの昔に消されてしまつたのかもしれない。

メンゴー氏はきわめて自然な口調で事件を述べた。「そうですな、私は自分が見た物をそのまま話しているんです。その正体を知っているかのご質問については・・・そうですな、全然わかりませんね」そうは言うものの彼はそれが道に迷つた犬だという説にははっきり反対する。あの場合の馬の反応としてはむしろ侵入者をけとばすかもしれない（管理人の犬も最近このひどい経験をした）か、またはこの種の危険から静かに逃走するだろう。

メンゴー氏にUFO関係文献に対する特別な偏好があつたとは思えない。われわれの話中に彼の息子がわり込んで言った。「たぶん火星人だつたんだ！」だが父親は耳をかたむけたようには見えず、常識人にふさわしく手を振ってその憶測を無視した。

この調査を始めてから数日後、地方紙の「サントルプレス」（一九六九年八月二十二日付）に出た或る記事が偶然目についた。それはポワチエの古い伝説を扱つたもので、ムーリエールの森の怪物と題してある（シャトー・ド・マルタンはこの大きな森の南西端のすぐ内側にある）。

次にその全文を掲げることにする。

ムーリエールの森の怪物



むかしはボワチエ地方では多数民が、夜間、特に一年の或る時期に雲の上を奇怪な動物がスイと飛ぶのを聴いたり見たりできると考えていた。彼らはそれを「狩猟ギャラリー」と呼んでいた。

一八三〇年頃、ムーリエールの森の猟場番人が特別に成功したオカミ狩りのあとで、数名の友人と共に一夜楽しく祝っていた。

真夜中に、この愉快な、たんまり飲めた、宴会のあとの余力をかって猟場番人はころよい気分で森の中を家路についていた。空には星々がきらめき、二月の夜は寒さもひとしおきびしい。

リコション（これが彼の名前である）は弾丸をつめた銃を肩にしていた。そして歩きながら、近くに現われるかもしれない有害な動物を警戒して目を開き続けていた。一時的な一杯きげんの状態にあっても、生まれつきのハンターの感覚を失うようなことはなかった。

森の中の小さな自宅から遠からぬ地点にさしかかったとき、突然コーモリが飛ぶのに似たはばたきの音を聞いた。「ははあ、狩猟ギャラリーだな！」とひとりごとを言う。

したたか飲んだ上等なワインで大胆になった彼は言った。「魔王のシカならいい標的になるぞ。とどのつまりは近づいて見とどけてやるからな」

突然、濃い黒雲が星明りを消すと同時に奇妙な耳をつんざくような音が聞こえた。銃を肩にあてて彼は黒いかたまりをめぐって発射した。恐ろしい悲鳴が響きわたると、力を失ったかたまりが足下に落下した。恐れおののいたリコションは一目散に家へ逃げ帰り、戸をバタンと締めかかぬきをかけた。

生涯でこんなにこわかったことはない。完全にわれに返ってから彼は一体何がどうなったのか思い出せない。ただ悪魔が放った怪物

一匹を射ただけだ。その復しゅうは恐ろしいことになるだろう。

森の中でただ一人、何の助けもなく一体どうして危険をのがれることができたのだろう。彼は言った。「ようし、もしおれが今夜を全く安全に切り抜けられれば、聖水やキリストはりつけ像や聖母像や聖ラデゴンド像などを買いに、明日はまっすぐ町へ行こう……」

この固い決意によっていくらか勇氣が出てきた。彼は折りの言語をとなえたが、ささいな物音にも震えて、あの恐ろしい怪物すなわち悪魔が眼前に現われるのを待ちかまえた。

こうして心底からの苦しみのなかに夜明けを待ったが、夜が明けらるまでに飛び出そうとはせず、明るくなったら自分が射った怪物を見つけることが実際にはできなくなることを望んでいた。

しかし家を数歩出たとたんに全身が震え出した。今や血の海の中に横たわっている恐怖の怪物を見たからである。

やっと平静さを取りもどしてから彼は怪物が結局完全に死んでいるのがわかったが、やはりびくびくしながら注意深く近寄っていった。手足が震える。たしかにこいつは黙示録のケモノにちがいない！

さてこの怪物をどう処置すればよいか。これは実際大きな問題だ。地中へ埋めてだれにも内緒にしておこうか。だが残念だ！ おれの手柄は人に聞かせるほどの価値があるのに……

問題をしばらく考えてから彼は自分の最も大きな荷車に馬を着けて、獲物を荷車上に載せるために持ち上げようとした。この難事はちょっと頭を働かせて一種のウインチを使って完了した。

この骨折仕事が終わってから彼はケモノの死体をワラで覆い、ボワチエに向かって出発した。

最初馬の脚はひどく震えたので殆ど動けなかったが、数回強くムチをあてると、まるで何か危険な状態から脱出しようとするかのようになり全速力で走り始めた。

やっとリコシ・ンは目的の地たる警察へ到着した。警察署長は怪物を見て猟場番人にだれにもしゃべるなど命じた。その結果半分ほど自信ありげに彼は、だれに対してもこの「ケモノ」が恐ろしい人間の顔をして巨大なツノをはやしていたと述べた。

この怪物はどうなったか？ ミステリーである！ しかしそうだとすると、噂がポワチエの町に広がって次のようなことわざが生まれた。「リコシ・ンのケモノのように醜い」

以上の話からどのように結論づければよいか？ この不思議な事件にはただ一つの確かな点がある。すなわちシャトー・ド・マルタンの地所の馬は何物かに恐怖したということである。一少なくとも馬に関する限りでは普通ではなかった。この「何物か」はあの不思議な緑の目の「所有者」であったと推測するのが妥当と思われる。

この「怪物」とポワチエの伝説の怪物とに関連があるかどうかも疑問である。しかしそれは別として、私に言わせれば、そうだと答えることに疑問もない。ゆえにただありのままを伝えておくだけにとどめよう。

(二十九ページより続く)  
ものである。

次章は「自由な誕生」として続けるつもりである。これは、他の惑星群が地球と同じ頃に創造されながらも、宇宙のプラザーズが各自の惑星で享受している天国のような生活をわれわれも作り出せる方法が述べられる。—第三章終り— (以下次号)

## トビックス

### トビックス

今年五月十四日から十六日までの三日間米国シカゴで世界予言者大会が開催された。各国の予言者たち百八十人が集まって地球上に発生する未来の大事件について、それぞれ秘法により予言したのだが、その内興味ある予言をピックアップすると—

\*三十年以内に日本列島とカリフォルニアに大地震が起り、大きな被害がでる。(フランス代表)

\*ベトナム戦争がエスカレートして、アジア全体を巻き込み、最後にアメリカと中共の戦争になる。

また、今年一月十日インディアナ州グリーリーのWWCA局が九人の有名な予言者を集めて行なった、一九七〇年を予言する「によると—

\*一九七〇年末、多くの空飛ぶ円盤が目撃される。円盤のナンを解く特別なデータが、一九七〇年中に或る小国から発表される。(H・シュレツベル氏)

\*宇宙(他の天体)から、援護を求める呼びかけがとどく。  
\*一九七〇年中に月の表面に別の国旗が立てられる。(ル  
ス・チンマーマン)

\*タイに戦争が起こる。米国は物資援助をするが、直接戦争に介入しない。(ジョー・デルイス)

## オラバリアの不思議な事件

ゴードン・クレイトン

ブエノスアイレスの新聞ラ・ラソンの一九六九年十一月二十五日の記事によると、アルゼンチン、ブエノスアイレス州オラバリア地方はまたもやきわめて不思議な出来事の発生地になっているという。一九六八年七月にオスカル・エリベルト・イリアール少年が父親の牧場で馬に乗っていた時に宇宙人に遭遇したのもその場所であった。

同じく怪奇なこの記事も或る農場へやって来た十七個の奇妙な光る飛ぶ人間について述べている。光線（複）を放って、それが物体を粉碎し、犬を眠らせ、大騒動をひき起こしたのだという。

それによると次のとおりである。「不思議な人間たちが出現した結果、この地域に大騒ぎが起こっている。その者たちの形、へんびな場所が集まったその態度からみて、おそらく大気圏外から来た者であろう」

この奇妙な人間たちは夜間に現われて飛びまわり、サーチライトのような、見なければ信じられないような鮮烈な光線を放射する。人がこの光線にあてられようものなら気絶し、犬は眠らされ、物体は粉碎する。

このような途方もない出来事に関して最もショッキングな話が、一農場の支配人とその家族から洩らされた。『ミ・レクエルド』という名のその農場はクロット地方にある。

地方紙『エル・ポピュラール』の記者（複）がそこへ出かけて目撃者たちに話しかけた。アキロ・ラモン・アコスタ氏（四四才）とその妻アメリア、二人の子供ヘルマン（六才の少年）とモニカ（十才）で、本日付の同誌には詳細な記事が出ている。

アコスタの奥さんの説明によると、こうだ。この前の日曜日（一九六九年十一月二十三日）彼女は二人の子供をつれて隣の農場（エル・カルメンという名の農場）へ行った。その支配人イビニョ・メンドサ氏にオラバリアまで車に乗せていってくれと頼むためである。

オラバリアへ行ってから帰る途中車のタイヤがパンクしたので、彼女は子供と一緒にメンドサ氏の農場で一夜を明かすことにした。

「私は可哀そうな夫を家にただ一人残してきました。夫の身に何か起こったのでしょうか」

ここでアコスタ氏の説明を引用しよう。「私は十一時頃にベッドへ入った。酒のようなものは飲んでいなかった。妻と子供が帰って来ないので少々気がかりだった。ついに眠り込んだが、ニワトリの鳴く時に目覚めるだろうと思っていた。朝九時頃にニワトリが三度鳴いたので私は起きた。台所へ行ってランプをつけ、マテ茶を準備し始めた。すべて静かで物音はしない。水ガメから水をくみ出そうとして庭へ出て行った時、奴らを見たんだ！ 幾人かの奇妙な人間たちがサーチライトのような非常に強力な光線で畑を照らしているんだ。奴らは針金の垣のそばにいた（この垣は家畜囲いと家とを断している）。台所から約十五メートルの所だ。

最初私は奴らを鬼火にちがいないと思ったが、こわくはなかった。相手の内十人は針金にそって行ったたり来たたりして地面を照らしてい

た。他の七人は家畜囲いの中にいた。家に最も接近した奴は私がい  
た所から約八メートルの距離に來た。そいつは針金を越えて庭の中  
へ入って來た。私は腰から下方へかけて奴らを見る事ができた。  
恐ろしかったけれどもどうやら奴らの衣服が輝いていたために透明  
であることがわかった。一番近くへ來た奴が「火星人か何か知らな  
いが一手中に棒のような物を持って飛び上がった遠ざかり、針金  
のそばにいた連中と一緒にになった。庭のすみに集まっていたグル  
プに注意をこらすと、一齋に強い光線（複）を私の方へ向けて照ら  
した。急に家全体が照らし出され、私はだれかになぐられたかのよ  
うに顔にパンチを感じた！ それで家へ帰り、台所へ入った。殆ど  
無感覚になったような感じがする。まるで氣絶したような状態なん  
だ。あまりひどかったので、部屋に銃があったけれどもそれを取り  
に行こうとさえ思わなかった。

だがひどいショックにもかかわらず、ドアの小窓からのぞいて  
見るだけの勇氣をふるい起こした。それで奴らを見る事ができた  
んだ！何と言ったらいかな！奴らは針金の端から端へそって三度  
ばかり走った。そしていつも地面へ光線に向けて照らすんだ。

時折光線を樹木に向けることもあった。しかし奴らが何よりも興  
味を感じたのは家から二十メートルばかりの所にある牛のフンの山  
だったらしい。みんながそこへ最も長くたかっていたからだ。

以上の出来事は約一時間続いたな」

新聞記者連は指示された現場へ行き、そこで馬のヒズメの跡のよ  
うな足跡をいくつも見つめた。アコスタは言う。「馬なぞ飼ってはいま  
せんぜ」また地面には多数の小さな穴があったし、草はきわめてな  
めらかなローラーでならしたかのように平らになっていた。

セニョーラ・アコスタが口を出す。「家の中にはほかに奇妙な  
事があったわ。たとえばドアにははめてあったガラス板がそのなの  
よ（三十センチ×二十センチ）。このガラスが不思議な光線で紛々  
にこわれていたの。こわれたガラスの破片は長さ四センチ以上はな  
かったわ」

更にアコスタ氏によると、家の中の犬たちはほえもしなかったと  
いう。「こいつらは防衛態勢をしようともしないんだ。一匹だけが  
おれと一緒に外へ出たけどね。台所へ飛んで帰ったよ。別な犬のネ  
ロはまるで眠っているかのようにはいつくばっているんだ」

続けてセニョーラがまくしたてる。自分が帰ってみると主人はひ  
どく興奮していた。「その時にあんたがたが自分でこの人を見れば  
よかったのよ！ この人は台所にいたけど何度もあたしに言ったわ  
「あんなものは存在しないとおれは何度も言っていたが、今は存在  
することを信ずるぞ！」ってね。可哀そうに目は血走って、頭痛が  
して、体が震えていたわ。夜になるとまた恐れ始めてサ」

アコスタ家はその土地で大いに尊敬されており、しかもリカルド  
・ポリタルエウ氏所有の農場に三十年間も住んでいる。

全く驚いた話だ。

UFO研究家はこの記事に多くの特徴を見出すだろう。それはか  
つて発生した数例の事件を思い出させる。ここでは一九六三年十月  
十二日にあったアルゼンチンのモンテマイスの事件（背の高い怪人、  
光線）と、それから九日後に同じくアルゼンチンのトランカスで発  
生した事件を引用するにとどめよう（農家がUFOに囲まれて、光  
線が壁を貫通し、温度を異常に高め、犬たちをマヒさせた）。その  
他にもアルゼンチンで強烈な光線を使った怪人の例が数件ある。

## ポリビヤの兇暴な怪人

オズカー・A・ガリンデス

一九六八年の後半に円盤研究者である私の友人ベドロ・メドラーノ君から私は新聞の切抜きを受け取った。これはもと彼がポリビヤのスクレのマウロ・ヌニェス氏から送られたものである。この切抜きはポリビヤの新聞「クリティカ」紙に出ていたものだが、惜しいことに日付は記載されていない。しかし切抜きに出ている記事は一九六八年の最初の数カ月間に発生したものらしい。

これはきわめて重要な記事だということがわかるだろう。というのはこれはアルゼンチンの隣国ポリビヤから出た最初の宇宙人記事であるのみならず、イタリヤのエンジニヤたるジャンピエトロ・モングッチによって一九五二年七月三十一日にベルニナ氷河で撮影された人間らしきものに、いろいろな点で著しくよく似ているからである。

### 遭遇

ポリビヤ西部のウユニの近くの小村オトコで、夕方六時にパレンチナ・フロレスというおかみさんが、羊とラマの群を家畜囲いへつれ帰ろうとして外へ出た。このラマは農場から一キロ離れた場所

彼女はずでに囲いの中へ羊を入れたので、ラマたちをつれて再度帰途についていた。その時羊囲いがプラスチックに似た材料の奇妙な網で覆われているのを見て飛び上がり、驚いた。しかも囲いの中で身長一メートル十センチ位の不思議な人間が動きまわっているのだ。この者は端にカギのついた管状の道具で羊を殺していた。

羊ドロボーに違いないと思つた彼女は怪人に石を投げつけ始めた。すると怪人はラジオに似た小型器具の方へ歩み寄り、その上部の輪を廻して急速に網全体を引き寄せた。

このときまでフロレスおかみさんはコン棒を手にして囲いに近づき、打ちのめしてやろうと思つていた。すると怪人は羊を殺したあの鋭い道具をもって彼女の方にたちむかってきた。相手は数度おかみさんをめがけて道具を投げつけたが、そのたびに道具は典型的なブーメラン運動を行ない、彼女の腕を切りつけては急速に相手の手許へ帰ってゆく。だが切り傷のどれもひどいものではなかった。

やがて怪人は網を吸い寄せた例の機械と、多数の羊の臓器を入れていたプラスチックのような袋を急いで寄せ集めた。怪人のリュックサックの両側から二本の延長物が飛び出る。これは地面にとどいた。するとただちに怪人は空中へまっすぐに上昇を始めて、すさまじい音響を発しながら消えて行った。

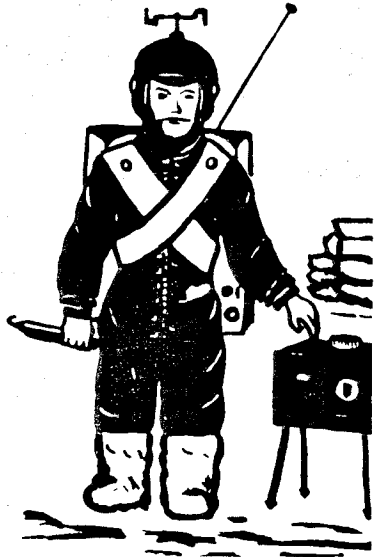
### 調査

この事件が近隣に知られるや大騒ぎになった。特に極端に恐れてこの話の中に未来の惨事の前兆を感じた田舎の人々の騒ぎは大きか

った。

ロヘリオ・アヤラ陸軍大佐、その息子のパブロ、アルフレド・ア  
ンプエロ中尉、カルロス・コソ中尉、ホアン・セア博士、地元警察  
署のヘスス・ペレイラ氏は、即刻公式な調査を開始して、目撃証  
人に対して徹底的かつ詳細な尋問を開始した。

一同は三十四頭の羊が殺されて、そのどれも消化器官の或る小部  
分がなくなっている事実をつきとめたのである。みんなの意見によ  
ると、フロレスおかみさんは正直な人で、確かに異常な物を見た  
のだということになった。アヤラ大佐の息子が怪人に関する彼女の  
説明を聞いてすぐれたスケッチをし、それが地方新聞クリティカの  
記事中に載った(右図)。



モングッチ事件との類似点

パブロ・アヤラのスケッチと、モングッチが撮影した宇宙人写真  
とを比較してみると、次の五個所の類似点があることがわかった。  
(注)モングッチ事件についてはあとの付記を参照)

- 一、どちらの怪人も背中に長方形の物体を背負っている。
- 二、両方とも背中その部分から「アンテナ」が突き出ている。
- 三、両方とも衣服が厚くてかさばっており、特に足はそうである。
- 四、両方とも右手に小さい管型の道具を持っている。
- 五、両方とも頭部は一種のヘルメットをかぶっているように見える。

(ただしモングッチ事件の怪人は海底探険の際に使用する水中  
メガネに似たメガネを着用している)

以上の類似点は明白であり、注目に値すると言つてよい。

セニョーラ・フロレスは初等教育を受けただけの人で、ゆえに  
UFO関係の文献を通じてモングッチ事件を知るようになったとは  
殆ど考えられない。(UFO文献もポリビヤでは殆ど見当たらない)

それでもなお彼女はインチキ物語をでっちあげて、自分の羊を三  
十四頭も殺すことよって物語の裏付をしたと考えられるだろうか  
? 私の考えではそういうことはあり得なかつたと思う。というの  
は、このような小農家の主婦の如き下層階級の人が、東の間の売名  
のために唯一の生計の資源である羊を犠牲にすると考えるだけでも  
全然問題外であるからだ。当然羊は羊ドロボーによつて殺されたに  
ちがいない、そのあとの話は彼女がねつ造したと考えられぬこと  
もない。

だがそりすると、動物そのものを盗まないで、ただ臍物だけを引  
き出した奴らというのは何と奇妙なドロボーだろうか?

とすると何かの野獣によつてなされたのだろうか? しかし野獣  
が他の動物の腹をあののようにきれいに切り開くことができるだろ  
うか? それはナイフのような鋭利な道具で切られたかの如き印象を  
与えているのだ。

それとも近隣の農民による報復行為だったのか？　しかし兇悪な下手人を逮捕させようとして当局へ訴えるのならともかく、とんでもない事件をでっちあげるといふのは、このような報復行為の被害者として合点のゆく行為ではなさそうだ。

最後に一つ。以上の可能性のどれかをわれわれが認めたとしてもやはり次の事を認める必要があるだろう。つまり初等教育と、文明からの実質的な隔絶にもかかわらず、フローレスは現代の空想科学小説の最も大胆な空想のレベルに充分に達しているような材料を作り出すことの可能な豊かな頭脳を持っているということである。

注　　釈（ゴードン・クレイトンによる）

一、私はモングッチの円盤写真が机上のトリック撮影による下手な作品だということに全く納得しなかった人にもまだ出会ったことがない。みんながその写真をインチキだと思っているばかりでなく、そのことがわかっているのだ。

しかし個人的に私はモングッチ写真をどうもホンモノのようにいつも感じていた。それで今非常な関心をもってジョン・キールが『SR誌一九六九年九・十月号の「すぐれた科学技術」と題する記事の脚注で次のように述べている部分を引用する。

「殆どの研究者と同様、私も最初はモングッチの円盤写真をトリックと片づけたが、ヨーロッパの消息筋から多量の情報を集めたり、写真をプロ写真家に慎重に検査させたりした後、その写真がホンモノであったかもしれないというチャンスがあると思っている。雑誌「トゥルー（真実の）」の臆病な編集者連も

独自にこのことに同意して写真の一枚を掲載した」

三類似点にはたしかに注目すべき点もあるが、ポリビヤの怪人が身長一メートル十センチ位と述べられているのに、モングッチはベルニナ氷河で見た怪人は見たところ普通の人間の大きさであると判断したと断言している。ゆえにどうやらこの二つの事件は同じタイプの人間とは関係ない。

モングッチ事件

ジャンピエトロ・モングッチはモンツァ製鉄所の三十才（当時）になる技師で、イタリヤ・エジソン協会の会員でもある。彼の話によると次のとおりである。

一九五二年七月三十一日に彼は妻と二人でアルプスのベルニナ山峰（イタリヤ側）のケルケン氷河付近を登山していた。突然二人は約百メートル離れた氷河の支流の縁の所に空飛ぶ円盤が着陸するのを目撃した。夫人はひどく恐怖して、夫にむかって物体へ近寄るなと言ってしきりに引き止めたので、彼は近づくかわりに写真を撮り始めた。二枚の写真を撮ってから一人のパイロットが出現して、歩いて機体の周囲を一周した。どうやら機体を調べているようだった。モングッチは更に三枚撮影した。すると間もなく円盤は無音で上昇して飛び去ったが、その時更に二枚を撮った。

モングッチはその写真類を現像焼付した。一九五二年七月二十七日にワシントン市で発生した有名な円盤騒ぎはこの頃のことである。それでモングッチの物語が広まるや彼はイタリヤや外国の記者から取り巻かれた。彼の写真を売ってくれというすさまじい申出があっ

たが、その結果みんなが写真の真びょう性に疑惑を表明した。しかも私立探偵たちまでが彼の私生活を詮索し始めた。一アメリカ人はベルサッリエロ（イタリアの或る有名な連隊の隊員）として変装し、モングッチを洗脳して矛盾によってその事件を破壊しようとした。

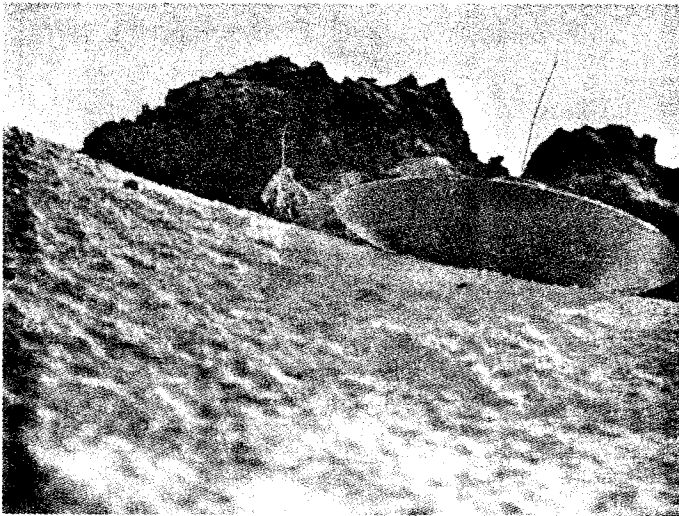
このようなやり口のためにこりたモングッチはだれにも会わないことにした。その後熟考した末、彼は写真の権利をローマの權威ある雑誌「エポカ」に売った。同誌の経営陣はモングッチの手記を掲載する際は写真も一緒に載せると確約したのである。ところが写真は発表されたけれども手記は載せられず、しかも写真の説明に、これはモングッチがミルク鉢とオモチャの兵隊を使用したトリック写真だとなるのを見てショックを受けた。

一九五七年にモングッチはこのひどい「いたずら」のために自分のよい職を失ったことをアルベルト・ペレゴ博士に語った（注||ペレゴ博士はイタリアGAPリーダー）。モングッチの上司はエジソン協会の会長であり、その協会からも除名された。

彼の円盤写真のデータは次のとおりである。カメラ||ユダック・レチナ1型。レンズ||シユナイダーF35。絞り||8。五〇〇分の一秒。フィルム||フェルラニヤ21

編者注||モングッチの円盤写真はローマの「エポカ」誌が買い取る前にすでにスイスGAPリーダー、ルウ・チンシュターク女史が入手して各国GAPへ発表していた。その公式な紹介記事はFSR誌一九五八年九・十月号に「モングッチ、世紀の円盤写真を撮影」と題して掲載されている。しかし当時これはインチキだという見方が強く、円盤研究界では殆ど問題にされなかった。ただチ女史だけが

各方面へ弁護記事を送っていた。同女史の調査によると絶対に真実だというが、円盤の中央部とパイロットの背中からアンテナ様の棒が突き出ているのが如何にもトリック然としており、それが大方の疑惑を招く原因となったようである。しかしベテランのゴードン・クレイトンも注釈でホンモノらしいと述べており、ジョン・キールもそのように言っているのは興味深い。



モングッチ撮影の円盤写真



## 質 疑 応 答

回答 久保田八郎

問 日本人は土星人の子孫であるということですが、それを歴史的に順序だてて話していただけませんか。

答 これはニュージージランドのUFO研究者ヘンク・ヒンフェラーが私宛によこした手紙の中で、アダムスキーが生前同地を訪れた際に日本人の祖先について述べたというくだけりがあり、それにより判明したものです。情報としてはただそれだけのことで、詳細は全くわかりません。

問 現在地球の周期的変化が徐々に進んでいます、非常に危険な状態になった場合の対策はすすんでいますか。

答 対策というのは各国政府の対策なのかブラザーズのそれなのかよくわかりませんが、後者については何かが行なわれているのではないかと推測します。

問 シャカやキリストの物語で、真理を悟った時、またはそれを広めようとする時に必ず現われ、それを阻止しようとする悪魔は実在するものですか。

答 妨害者を悪魔の如く描写した誇張された記述か、または心中に起こるネガティブな波動の感受をひゆ的に悪魔にたとえたのか、いずれかであろうと思います。

問 シャカはお金を受け、許すことは官能の欲を許すことである。仏教の比丘は常に受け取ってはならないとし、またマーガンディヤーの要求をしりぞけ、女をば悪臭に満ちたものであるとしてののしつたとありますが、他の惑星の人達はそのような必要悪と見られる物をも含めて、どのように解決していますか。

か。(滋賀県 関谷正明)

答 仏教の原理は非常に深遠かつ難解で、容易に説明できませんが、簡単に述べますと、仏陀がラーヂャグリハの大商人スダッタの帰依によりコーサラ国の首都シュラーヴァステイの郊外に祇園精舎が建設されて教団の基礎ができたとき、そのメンバーは主として比丘(男僧)から成っていたのですが、八才以上の少年はシュラーマネラとして入団を許可されました。その少年僧のための戒律が殺さない、盗まない、性行為をしない、ウツをつかない、酒を飲まない等の十戒で、二十才に達すると比丘に昇格して実に二百項以上の戒律を守らしめ、きびしい修行が課されています。

一体なぜこんな苛酷な生活を強いたかといえ、極端にセンスマインドをコントロールしようとしたわけで、その理由はアダムスキー哲学とは異なって次のようなものです。すなわち仏陀の真理はブラーフマン・アートマン哲学の如き形而上学的主体ではなく、現実の事実をとらえた上での縁起説です。つまり現象界は神が創造したのではなく、それは無常であり、諸要素は常住で、この現象界は人間の欲望に基づいた行動によって活動し、それによって人間は輪廻するので、その輪廻の世界から解脱するためには欲望の根源をたち切つて絶対的な虚無(安っぽいニヒリズムではない)に没入することが肝要で、そのためにこそきびしい戒律による修行が必要だとしたわけです。

ところがアダムスキー哲学では、万象は、宇宙の意識(神)の創造だといえます。そうすると仏陀の説とは矛盾するようですが、私にはどうもこの両者が或る根源的なものを両側面からとらえたような気がします。もちろん經典の記録位ではチャーキヤムニ(シヤ

カは正しくはこのようにいいます)の真意はわかりませんし、第一、シャーキヤムニ以外のなにびともその悟りの本質を理解できなかったのかもしれない。現在でもインド奥地で修行するヨギの間ではシャーキヤムニは古代のヨギ(ヨガの行者)であったと信じられてゐるということですから、当時の積尊の境地が現代人に容易に理解できるとは思えません。

さて、たしかに女のからだは臭いのですが、それは鼻持ちならぬ悪臭というようなものではなく、男からみれば心地よいニオイにきまっています。このニオイは男を引きつけてやまない女性共通のもので、そうなればやはり、「宇宙の意識」の創作であり、女性への贈り物であると考えても不都合ではないでしょう。したがってセンスマインドにおぼれない限り男がそれを賞美するのは自然の法則に基づいた行為であると言えないでしょうか。そうでなければ女性がこの世に創造された理由が見当りません。ただしこれにおぼれすぎるような場合は前記の戒律の一つでも実行するといひでしよう。進歩した他の惑星では金(かね)が存在しないで、必要品はすべて平等に分配されるという事は、アダムスキーの各著書に述べてありますから、それをお読み下さい。ただしこれをもって共産制と早合点してはいけません。それはいわば進歩した「共有制」ともいへべきものようです。所有欲のない共有制ですから地球の共産主義とはまるで異なつたものです。

問 アダムスキーの説によりますと、人間のセンスマインドは一代限りで肉体と共に滅びるものであるとし、一方人間を生かしているのは宇宙の意識であるとなっています。とすると、人間が生まれかわるごとに進歩してゆくものは何なのでしょうか。(兵庫県 重松

昭春)

答 この答としてはアダムスキーが「記憶」であると述べていますが、簡潔な記述に終わっていますから、ここで注釈を加えます。

アダムスキーが金星へつれて行かれて、かつての地球上の妻であつたメリーの生まれかわりの少女と会つた時に、相手は前生の生活をすべて記憶しており、しかも過去の地球上の経験は進歩の妨げになるので故意に思い出したくないと言っています。こうした「生まれかわり」を全くのナンセンスとしてアタマから否定する人は別として、ここではそれを肯定して何かを考えようとする人を対象とします。

結論から申しますと、人間の進化—特に生まれかわりを経るに従つて進化する実体—は本人の「記憶」であるといえます。このことは「生命の科学」第七課の「宇宙的記憶」を熟読されればおわかりになるはずですが、この「宇宙的記憶」というのはいわゆる普通人の記憶—プラトンの名づけたムネーメ、アナムネシスから出発して近代のH・エビングハウスの研究を基礎とする再生・再認・固定等の学説で表わされる記憶とは異なり、もっと何か不可知な要素を意味するもののように思われますが、詳細はわかりません。しかし前生の記憶に基づいて述べた事柄を実地調査によりそれが真実であつたことが判明したという事実がインドにもあつたように、宇宙的記憶は有限の肉体を超えたもので、人間の魂の中にひそむ神秘的な実体であるように思われます。たしかに記憶が残存してこそ反省と向上があるのであつてみれば、宇宙的記憶があればこそ生まれかわりによる進化があるということになるでしょう。

問 アダムスキーの哲学はよく理解できるのですが、精神の高揚が

どうもうまくゆきません。よい方法はないでしょうか。(質問者多数)

答 その方法はそれこそアダムスキーが著書「テレパシー」や「宇宙哲学」で述べていますから、私などが口をはさむ事柄ではありません。つまり自分の想念を観察して記録する方法です。しかし具体的な実例がないとその気になれないでしょうから、参考までに私自身の体験や意見を述べることにします。

この想念観察法というのが何でもないことのようにでありながら、実はすばらしい方法であることは実行してみればわかります。しかし簡単そうに見えても相当な忍耐力を要しますから、そのつもりで計画する必要があります。

私自身はかつて「毎十分想念観察法」というものをあみ出して、数ヶ月実行したことがあります。右の想念観察法をもっと精密化したもので、手帳を用意して、朝から夜までわき起こる宇宙的想念と利己的な非宇宙的想念とを左右のページに十分間ごとに記録してゆき、一日の終りに集計して点数を出し、後者が多ければ(多いにきまっています)反省して翌日はそれを少なくするように努力するのです。詳細は本誌第三十八号(品切れ・絶版)に掲載しましたからご存知の方も多いと思いますが、これによって一時すばらしい心境に達したことは事実です。しかし職業によってはこの方法は不可能です。そこで或る会員の方は一日中腰に数取り器を何個もつり下げ、非宇宙的想念を感覚器官別に分けて、それが起こるたびに数取り器を操作して点数を集計し、それによって反省度を高めているという事です。まことに高貴なる努力であって、非求道的な人が何と批判しようとも、この努力は燦然たる輝きを放っていると思いま

す。

さて、人間の知覚力の程度や思考内容は千差万別ですから、自己の精神の高揚を図るのに、一定の公式に基づいた万人共通の修養法というものはなく、各自が自己の程度に相応した方法を考案して修練を行えばよいと思います。人間はそうするように出来ているのであって、一定の方法を万人に強制するのは誤りであるといえます。ただしどんなにすぐれた方法があるにしても実行しなければ何にもなりませんから、まずやってみることが肝要です。批判や理論はその後の問題です。結局重要なのは一方法の重要性をどこまで認識するかということですが、そんなことまでやる必要はないのだと考える人にとっては如何なる方法が示されても意味はないでしょう。貧しい少女が初めて夜会へ出席する段になってダイヤモンドの指輪の必要を感じた時に、その重要さを認識するように、天の父(宇宙の意識)の眞の席につらなろうという心底からの願いがなければ、すばらしい修練法というダイヤの指輪が輝いていても、それが目に映らないかもしれません。むづかしいことですが、試行錯誤(七こころび八起き)をくり返すより仕方がありません。

ところで、自分にとってはすばらしいと思われる方法を考案してもそれが想念のコントロールに関する限り、終日連続的に行なわねばだめであって、一日の内わずか数十分だけの行法をやるだけで、あとの大部分は日常の低俗な想念海にひたっているというのはさほど効果はないでしょう。「人間は神の子である」という思想をただ漠然と心にいだいているという程度では殆ど何にもならないようです。積極的な想念観察と分析までやらねばだめだと私は極力強調します。

想念観察については右のとおりですが、更に別な方法として私が考えたものに意識拡大法があります。これは身体をゆったりさせて心身共に落ち着かせてから、自己の意識（いわゆる普通の意識）を一点に集中させたあと、それが次第に空間に拡大してゆくものと観じます。最初は自分の意識が室内一杯にまで拡大して室内と一体化したと腹の底から感じるようになるまで想念を続け、こうして次に家との一体化、町との一体化、国との一体化、地球との一体化、太陽系との一体化、銀河系との一体化、更に広大な宇宙空間との一体化、というふうに意識を限りなく拡大してゆきます。そうして自分が心身共に宇宙空間にまで広がって宇宙の中に没入してしまつたところの底から感じるまで想念を続けます。そのような観法によつて気宇広大になつたところで、しよせんそれは「空想」にすぎないではないかと言ひ人があるかもしれませんが。空想は確かに一種の想念ですが、それはきわめて弱い想念なのであつて、このような積極的な強い想念とは別個なものであると思ひます。しかし何事もまず空想から出発しないことには具体的な結果は得られませんから、空想とは具体化へのかけ橋であると言えます。たとえば、肉体の病氣は本人の思念力によつて治るのではないだろうかと思ひついたらすれば、それはまだ空想の段階ですが、やってみようと積極的な強い意念を続ければ、これはもう空想ではありません。実際に病氣が治ることがあるからです。このことは神戸の巽直道先生のグループでイヤというほど豊富な実例をあげておられます。ただし私の言ひ意識の拡大法はヤドカリみたくに自分のカラの中（中）に小さく縮んでいた意識を大きく広げることだけを目標としたもので、病氣を治すのとは違ひます。それはまた別な思念法があるのでして、その点は右の

巽先生が大ベテランですから、先生に照会されることをおすすめてます。

さてこの意識拡大法は一日の内わずか二、三十分だけ行なうのではなくて、道路を歩行中も乗車中も絶えず想念を続けるように習慣づけます。自己の意識を歩行中の道路と一体化させて、われが地面か地面がわれかという心境に到達するようになるまで想念を続け、大地の中に没入してしまひます。これも単なる空想ではなく、積極的な思念であり、自分の思维傾向や内容を変化させるための一方法です。この方法によつて惑星単位のもの（の）の考え方を得ようといふのですから別段わるい事ではありません。あるいは夜間、星空を見つめて無限の宇宙に対する認識を深めようと努力する人があれば、実に立派な行爲であると思ひます。

次に私が考えたのはダイヤモンド観法ともいふべきものです。これは宇宙空間内の現象一切を巨大な一個のダイヤと見たてて、あらゆる現象は—特に人間に重点をおきます—そのダイヤの表面の微小な一ファセット（切り子面）であると見るわけです。ご存知のようにダイヤモンドはたしかに美しいものですが、それは表面がカットされて多面体になつてゐるために光線を反射するからなので、そのカットも実に巧みに行なわれており（私は時折職場でダイヤモンド関係の文献を翻訳しますから少し知識があるのです）、凝視すると神秘的なファイヤー（炎）を放つのがわかります。そこで万人はすべてこの一ファセットに相当し、どんなに醜悪に見えても相手を凝視すれば必ず本人の持つファイヤーやブリリアンス（輝き）が発見できるのではないかといふ考えが生じたわけです。それが発見できれば、それは相手に対する凝視が足りないといふことになるのでし

よう。凝視というのはヒュ的に言っただけで、何も相手の顔を穴があくほど見つめるのではなく、実際は相手から良き印象を受けるように「警戒」の状態にあることを意味します。

しかし問う人があります。「自分は他人を神の子として尊敬しようと思っても、どうしてもできない。実際に、利己的になって人に迷惑をかけたり当たり散らして人からきらわれる人間がいるではないか。そんな者がどうして神の子と思えるか？」と。そこでまた観法をあみ出す必要があります。まず質問をしましょう。一体あなたは手先の技術でもって人体の如き超精密な物体を作ることができずか？ おそらくできないでしょう。どんなに科学が進歩しても魂を持つ人体を手先で製作することが不可能だということになれば、もっとも未来においては人体を創造できるという学者もいるようですが、私はできないと思います。従ってこれは私だけの理論ですが、そのつもりでお読み下さい。人間の存在はまことに不思議なことだと思わないわけにはゆきません。たとい隣家にどんな意地悪バアさんがいて近所の人々にあたり散らすとしても、よく観察すればそれは実に不思議な存在です。環境の変化に反応して怒ったりわめいたりして奔馬の如く感情を自由に表現する生物体を人間が科学技術で作れるでしょうか？ できないでしょう。人体どこか野辺に咲く一輪の花さえも作れないでしょう。とすると私たちの周囲には創造の設計や過程に関して人間にとって全く不可知な物体が存在していることとなります。考えればこれくらいに不思議なことはありません。

こうした素朴な驚異から出発しないことには覚醒ということはありません（私にとっては、の話です）。人間の手で創造できない

超神祕的なすばらしい芸術作品を眼前に見ているということになれば相手の激しい感情の発露もこれもまた神祕的な現象だということになります。そうなるも相手があたり散らしても冷静に客観視できるようにになります。そして、むしろ他人を観察するのが良い意味において楽しくなり、同時に自分自身の存在も楽しくなってきます。これはセンスマインドの視覚のみで他人を見て楽しくなることとは意義が異なりますから、混同なきようにお願いします。

ブラザーズがアダムスキーを通じて伝えたティーチングズの中で最も重要なものの一つは、地球人は感情の抑制ができないので、これを克服して自由にコントロールする力を身につけよということです。私たちには地球人の感情的な表現は当然の如く感じられますが、ブラザーズにはそれが奇妙に映るものようです。その意味で言えば、進歩した人とはまず感情のコントロールが自在である人といえるでしょう。これを抑制できない人が一人でも周囲にいるだけでも、雰囲気は低下してみんなが迷惑することはだれも知っているとおりです。そうした「当たり散らし屋」を私の郷里の方言で「ジラ者」といいますが、私の過去の半生はそのジラ者に取り巻かれるためにあったようなもので、人間の感情の抑制という問題について骨のズイまで考えさせられたものでした。また感情を抑制する力を持つ人の高貴さを身をもって教えて下さったのは恩師数名とその他のすぐれた方々です。人間の価値論になるとかく複雑な理論が展開しがちですが、私はあまりむつかしく考えないことにしています。

△本号より質疑応答欄を設けました。ご質問を歓迎します。取捨選択は当方におまかせ下さい▽

## なぜ彼らは来るのか (2)

フレッド・ステックリング

### 第二章 聖書の予言の実現

一九六四年一月下旬にローマカトリック教会はバチカン機関誌、*オブセルバトール・ロマーノ*に声明を掲げた。すなわち教会は目下宇宙使節団を訓練中であるが、これは地球人が太陽系内の人間の住む別な惑星に到達した時、われらの信仰を相手に教えるためだといふのである。

一九六五年十二月十三日には、福音伝道者のビリー・グラハムがワシントン市の国防当局でクリスマス・メッセージを述べた。ワシントン・ポスト紙によれば、彼は十二月十四日に五千名の国防当局職員に演説して、次のように話したという。

「地球は神にそむいている唯一の惑星である。聖書には他の惑星群にも人間が住んでいると述べてあるが、この地球は反乱の状態にある唯一の惑星である」

またワシントン・イーヴニング・スター紙の報導によると、一九六六年五月二十六日のカリフォルニア州アナハイムにおける米国天文学会大会の席上、フォーダム大学の地震学者で科学者で僧職にあるジョゼフ・リンチ博士は四百名の科学者や宇宙開発技術者に対し

て講演を行なったが、その演題は「他の惑星(複)上の生命」であった。彼は言う。

他の惑星(複)の住民のなかには天使のような、超人<sup>1</sup>がいるかもしれない。神が自分の良さをわかち与えようとする欲望は、人間の住む無数の銀河系を持つことよって一段と満たされるだろう」  
四百名の科学者団は最後にリンチ博士に拍手喝采して、「大気圏外の生命の探究」の技術的な面に没頭したのである。米宇宙局エイムズ・リサーチ・センターの生命学部の副部長であるハロルド・クライン博士はリンチ博士に講演を依頼した人だが、次のように言明した。

「私はリンチ博士のとった積極的見解に驚いたと言わざるを得ない。われわれが他の惑星に知的生命を発見する場合にそなえて教会が準備していることは明らかである」

ハンドブックたる聖書の内容を熟知している教会関係者は、これ以上宇宙からの訪問者に関する事実を否定できないために、このような声明を発しているのである。彼らは真理の使徒と称している中で、真実を擁護することを恐れはしないだろう。

このことはヨハネの福音書の中でイエス・キリストが述べた次の言葉を思い出させる。「わたしの父の家には住む部屋が沢山ある。もしなかったら、わたしはそのように(住まいはないと)言っているはずだ。と言うわけは(父の家には部屋が沢山あると言うわけは)わたしがあなたがたのために場所を用意しに行くからなのだ。それは(場所を用意しに行くのは)わたしがいる所にあなたがたもおらせるためなのだ」(以上カッペ内は編者注)

右の言葉をこれとは別な意味に解釈する人があるだろう。だがイ

エスは、多くの部屋」という言葉の中に人間の住む別な惑星群を意味したのである。この言葉を裏付けるものとして、ヨハネ八・二三を讀者に思い出させたい。「あなたがたはこの世界の出身だが、わたしはそうではない」

以上のことからして、もしグロハム氏、リンチ博士、イエス、パウロ、エゼキエル、エリヤ、エノクラを「ウツつき」と呼びたくなければ、宇宙からの訪問者に関する次のような聖書の物語を一般人は認めざるを得ないものと確信する。ゆえに聖書に従ってその参照個所の言及を続けることにしよう。

旧約と新約聖書の中で何度も「雲」が惑星間訪問者の輸送手段として出てくる。詩篇一〇四・三では「雲をおのれの戦車とし」とあり、ダニエル書七・一三—一四には「見よ、人の子のような者が天の雲に乗ってきた。わたしはそれを見たのだ」とある。イエスもこの「雲」を旅行用に用いた。というのは使徒行伝一・九において「イエスは（彼らが見ているあいだに）上げられ、雲がイエスを受け入れて、見えなくなつた」と述べてあるからだ。創世記六・二と六・四では次のとおりである。「神の子たちは人の娘たちを妻にめつた。そして娘たちに子をませた」この「神の子たち」は創世記によればわれわれと同様の肉と血を持つ人々であるが、地球上の女を妻としてめつたのであり、そのため女は強い健康な子供を生んだのである。

イザヤ書六〇・八で再び雲が出てくる。「雲のように飛び、ハトがその小舎に飛び帰るようにして来る者はだれか？」これは小型偵察用円盤が母船に帰ることを意味するのである。イスラエルの人々はこの「雲」をたいそう頼りにしていた。「昼は雲の柱をもって彼

らを導き——」（出エジプト記一三・二一）

空飛ぶ円盤と宗教とを一緒にするなと忠告してくれた人々がいる。しかし分割することなしに理解する人ならば、宗教の起源と宇宙の訪問者とのあいだには決定的な関係があつて、これを否定できないことが直ちにわかるだろう。それで、聖書は円盤と関係をなしと確信しているような人々には次の記事をお知らせしたい。ライフ誌一九六六年四月一日号には円盤の存在に関して次のようなすばらしい記事が出ています。

「旧約の予言者エゼキエルが、火の車輪」と出会つたと記録して以来、今日までずっと人々は空中に円盤型の物体を見てきたのである」

ここで予言者エゼキエルの正確な物語と他の世界から来た人々とコンタクトした彼の体験をお伝えすることにしよう。エゼキエル書の第一章は円盤とその乗員の詳細な記述を与えている。問題の宇宙船は一個の輪の真中にある輪のように見えた。船窓は船体周囲の「眼」と述べられているし、円盤のドームのまわりのリング（パワーコイル）さえもエゼキエルによって第一八節で述べてある。この物語は、エゼキエルがエルサレムへ旅するのにこの種の乗物を用いたと述べ続けている。この小型円盤は、エゼキエルが宇宙人から与えられた重要なメッセージを役人にとどけたあと、バビロンへ彼をつれて帰るためにエルサレムの上空で待機していた。エゼキエルは言う。「わたしが見ていると、見よ、激しい風と大いなる雲が北から出て、その周囲に輝きがあり、絶えず火を吹き出していた」宇宙船が着陸したあと、エゼキエルは次のように報告している。「その中から四つの生きものの形が出てきた」更に「生きもの」のクツにつ

いて述べており、それは子牛の皮で出来ているように見えたが、磨かれた真鍮のように光っていた。

また、パイロットたちは宇宙船を完全に制御していたとも言っているが、これは彼らが行く所へはどこでも、輪が行ったからである。輪が静止している（または停止している）ときは生きものも静止していた。そして生きものの霊は輪の中にあつた。ここでエゼキエルは別な惑星から来た宇宙船とその乗員の完べきな描写をしているのである。しかも彼は宇宙人たちとの会話を恐れることなく公表した。「彼はわたしに言われた。『人の子よ、立ち上がれ、わたしはあなたに語ろう』」エゼキエルはこの男に会って全く謙虚になつたにちがいない。彼はひざまづいていたからだ。それで宇宙人は彼に話しかける前に、立ち上がれと言つたのである。相手はエゼキエルにエルサレムへ帰って、これから与えるメッセージを伝えよと言つた。続いてエゼキエルは彼らの宇宙船に乗せられて、輪の音を大きなシューッという音だと述べている。たしかにこれはジョージ・アダムスキー氏が小型円盤に乗つた時の体験を述べた内容と殆ど同じである。このことは、空飛ぶ円盤同乗記<sup>1</sup>に出ている。またアダムスキー氏は地球人に伝えるための宇宙人のメッセージを与えられ、数度にわたつて円盤と母船を撮影する特権も与えられた。これらの写真は最もすぐれたもので、今なお民間人の手中にある。そして全部が彼の著書中に掲載されている。近年になつて多くの円盤写真が撮られたけれども、質においてアダムスキー氏の写真には追いつかなさう。

何度も聞いたことだが、『空飛ぶ円盤同乗記』は世界の多くの家庭でパイブルのように大切にされているとのことである。その書は

一種の宝石であり、偉大な知識と知恵で満たされていて、この世界をより良き住み家にするためのヒントを沢山含んでいる。

アダムスキー氏の他の世界から来た人々との体験はエゼキエルの体験ときわめてよく似ているので、この章でそれに言及する必要があると思つたのである。

パイブルの時代に宇宙からの訪問者と話したのはエゼキエルだけではなく、予言者ゼカリヤも葉巻型宇宙船について、旧約のゼカリヤ書の第五章で、『飛んでいる葉巻』と報告している。宇宙人たちとの会話で相手はゼカリヤにむかつて、間もなくエルサレムで起るうとしている非常に興味深い物事について語つた。

以上はなにびとも否定できない事実である。宇宙人の訪問は地球上のあらゆる宗教の基礎になつているのである。更につけ加えたいのは、この訪問は今まで決してと絶えたことはなかったということだ。というのは、殆どどの世紀においても大気圏外から来た宇宙船の着陸の記録が存在するからだ。他の惑星から来る人々は地球の幼い兄弟を援助することを思いとどまらないう。彼らこそわれわれがいつも話している真の救世主であり、宇宙的な愛と希望に満たされているのだ。われわれも宇宙友愛の統合計画の一部になれるだろう。

彼らもたらした哲学はイエスの真の教えを例証している。たとえば、金星や土星の隣人たちは大師がわれわれに与えてくれたような教えに対して、リップサービス（口先だけのサービス）を与えてはいない。彼らはこの教えを生かしているのである。彼らは兄弟の保護者である。彼らは他人からしてもらいたいと思うことを他人にせよという言葉の生きた例なのである。実際彼らは地球人の狭い考



え方をはるかに超えて進化している—それはいわゆる宗教によるのではなく、自我と自然の法則との研究によるのである。

われわれの教会は地球上の人間に慰みを感じさせてきたが、人々に真実を教えはしなかった。(殆どあらゆる物事がウソに基づいている今日のこの世界で、ほんとうに真実を知りたがりたり真実に直面したがりたりする人がいるだろうか?)

常に真実を提示すれば友人のすべてを失うかもしれないようなこの世界で、私は要点にふれてきた。われわれは長い世代を通じて現状のもとに育てられてきた。そして神秘的な物事やウソがわれわれの生活の一部になっていくことを知っている。しかもこれはまた他人に対する憎悪、嫉妬、差別等に役立っている。

人間のだれもが同じ創造主すなわち英知によって作られたことを常に忘れてはならない。万人がこの事実を認識するならば、今日存在する混乱の多くをなくすことができるだろう。

### 第三章 円盤、宗教、科学

教会の本堂は依然として存在し、数千年も続いた伝統的行事や儀式で明け暮れしている。教会は創造主すなわち神を見出すべき場所をまだきめていないのに、一方科学は世界の殆どの教会指導者の理解をはるかに超えて進歩してきた。宇宙の英知の存在を人間に立証したのは科学である。論理学と数学は科学が達成した二大業績であり、同時に未来の宗教の基礎となるだろう—もし宗教が存続したければだ。未来の宗教は信仰だけでは存在できない。価値があるのは知識なのである。進歩した科学的な世界では、迷信、儀式、ドグマ

に基づいた宗教は存続の機会を持たないだろう。宗教が科学的な原理を受け入れて、創造力が働いている様子を論理的に説明しなければ、未来の世代は多くの疑問を持つだろう。

全般的な宇宙の英知の存在を立証し説明するためには、われわれの自由になる物理学、数学や科学がある。ゆえに過去に基づいた如何なる説明法でも人々はただちに拒否するだろう。なぜなら、過去の偉大な人々の教えてさえも科学的な原理に基づいているはずだが、後代にひどく誤解され、ゆがめられてしまったからである。

神すなわち創造主に至る真の道を見出すには、人間は自分自身を知る者になるように指導されなくてはならない。神はまさにわれわれの内部にあるからだ。ゆえに儀式やドグマは、生命の科学によって置きかえられる必要がある。人間に自己の理解を与え、宇宙における人間の正しい位置を理解させてくれる科学を探究することである。他の世界の人々は自己と自然の法則を研究することによってのみ進歩したのである。前述のように彼らはピリーヴァー(信ずる人)ではなくてノウァー(知る人)である。彼らはあらゆる生命の、与え手、すなわち人間を存在せしめている、意識」と、日常生活で刻々行なわれている、意識の指導」とに対して、確固たる信頼感を持っている。彼らは真の兄弟愛を実践しているが、それは自分を空しくして与えることを意味するのである。尊敬と理解が彼らの生活の基礎である。

しかし科学者の中には宇宙の調和ある働きに言及するとき、神、という言葉を避ける傾向がある。殆どの人間の心にとっては、神とは人格的な実体として受け入れられているが、これはこの偉大な無限の、創造力についてかなり狭い考え方である。創造の働きを探

究し、それを全体的な宇宙の英知の働きとしている宇宙人は、われわれが人格化させているものについて、より大きな理解力を持つに至ったのである。

故アルバート・アインシュタイン博士は愚かな人々から無神論者ときめつけられたが、神に関する博士の説明や感じ方においては次のように述べている。

「私の『宗教』は、無限の『最高の英知』に対する謙虚な崇拜から成っている。その『英知』はわれわれの弱い意志によって知覚し得るごく微細な面の中に自らを現わすのである」

次にジョージ・アダムスキーが宇宙の神を説明した言葉を引用する。

「形而上学の学徒すらも非個人的な神を充分に理解してはいない。神は無数の太陽系のどれにもひそんでいる。太陽系を構成する太陽や各惑星、形ある物を構成する原子群等の内部にある。しかるに人は神がどこかの特殊な場所にいるはずがないということがわからない。神はすべてなのであり、神の外には何もない。神は、限界なきこの宇宙全体に影を投じている力であり、『英知』なのである」

われわれは神は天に見出されると聞かされてきた。しかし天とはどこなのか？ イエスの言葉によると「天国は人間の内部にある」という。ゆえにもし天国が人間の内部以外の場所にはないということになれば、地獄も外部にはないと考えるのが妥当である。

科学者が伝えたところでは、原子の中の生命すなわち英知という生氣は実際にはわれわれが神と呼んでいるものであるという。科学者は核の中にあるこの『生命』を、『原子の魂』と呼ぶ。それは永遠に生きる宇宙の英知なのである。原子核の中心はあらゆる生命と英

知を放射している場所であることが立証されている。数百万光年彼方の原子ばかりでなく、われわれの肉体を形成している原子の中でも放射されているのである。たとえば、このことはイエスがかつて言った言葉「われわれの肉体は生ける神の神殿である」「私をつらぬいて働いている父は、あらゆる仕事をする」を説明している。

不変の親和の法則に従って宇宙の万物を形成している原子の動きを研究すれば、イエスが創造主すなわち父の万象に対する完全な平等さについて語ったときに何を意味するかがわかるだろう。宇宙に分裂はない。生命の息は善人にも悪人にも万人に与えられているからだ。宇宙の英知の指導なしに何物も存在し得ないからだ。

人間は善悪のいずれにせよ原子力を利用することができるが、原子を作り出すことは絶対にできない。人間は無数の品物を作るために材木を利用できるけれども、生きた樹木を作り出すことはできない。自然から学んでいるのは人間であって、自然から人間が学ぶのではない。このことは自然が宇宙の英知の指導下に正しく働いていることを立証する。

この惑星地球の大気であるいわゆる『無』の状態からプラスチック、ナイロン、その他の合成繊維のような物質を作り出せるほどに科学は進歩している。だが再度言うと、われわれは原子、分子、細胞等、あらゆる可視的な物を形成している生命のレンガを利用してしているのである。それで実際にはわれわれは自然の材料以外の物を用いてはいないにもかかわらず、これらのいわゆる『奇跡』が教会の指導者を狼狽させている。というのは、彼らはこんな奇跡はあり得ないと思っていたからだ。

そこで言えるのは、神と共にあれば万事が可能だということであ

る。正しく理解するならば、これはまさに真実である。しかし、われわれは神は人間の内部に宿るのであって人間と共存しているのではないということを知っているので（しかし人間は自己の無限の能力に気づかねばならない）万事が可能である。なぜなら子は父と同様であるからだ。不幸にして科学者が行なっている奇跡の多くは、破壊の目的に誤用されている。しかし発明のなかに文明の進歩のために用いられてきたものもある。

しかしわれわれの心が如何に真実の宇宙的印象を曲解しようとも、創造主はわれわれが何を作り出そうとも支持されるのである。用いられる元素が親和の法則に従って融合する限り支持されるのだ。元素が誤用されればわれわれは自身を紛々にするだろう。このことは起こったのであり、今後も多くこの機会に起こるだろう。というのは米国以外の数カ所の研究所がサポータージュのせいとはいえない激しい爆発を起こしたからである。われわれは学習の段階にあるので、間違いをしやすい。こうした過失の訂正を通じて、われわれはそれから学ぶほどに謙虚である限り、未来の中に正しい道を見出せるだろう。全然何もやらないよりも過失をおかすほうがよいこともあるのだ。

近年になって世界の各教会による非常な努力が二、三の理由でなされてきた。まず教会の聖職者をあらゆる科学の分野で教育することである。これは聖職者を、今日の世界で発生している物事に関して時代遅れにならぬように育てる必要を教会が認めたからである。第二に、分裂を排除する目的であらゆる宗教や教会を統一することである。創造主の目の中には分裂はないのだ。第三に、教会の目的に関してこの世界の人々のあいだにある誤った考え方を排除すること

とである。パチカンの最近の報告によると（ワシントンポスト紙一九六六年十一月九日発行）、次のとおりである。

「法王、共通の聖書採択計画を是認

パチカン市、十一月八日（AP）キリスト教統合運動において、パチカンは本日次のように声明した。法王パウロ六世は共通の聖書にきめるため、他のあらゆる宗派と協力することをローマカトリック教会に認可した。共通の聖書計画が全世界のキリスト教徒を統合する努力の基本になると、全キリスト教運動で声明された。共通の聖書をなしに統合はあり得ないという」

近隣の惑星群の人々はアダムスキー氏と一緒に全キリスト教会議を開くようにとローマカトリック教会へ進言したのである。そしてご存知のように、この会議はこれまでにきわめて効果的であった。この困難な仕事で宇宙人と共に働いたジョージ・アダムスキー氏は、故ヨハネ二十三世から完全な承認を与えられた。アダムスキー氏が宇宙人から厳封されたメッセージをパチカンへ伝えた時の一九六三年五月三十一日に、法王はア氏へ黄金の名誉メダルを贈ったのである。

近い将来に世界を平和裏に統合しなければならぬのは世界の教会であって政府ではない。父の仕事にとりかかるのは教会の責任である。

ときとしてわれわれは考えねばならない。「われわれがこの世界に住んでいるあいだに利用するようにと創造主から与えられた物を分割したり所有権を主張したりするために、人間は一体どんな権利を持っているのか？」と。われわれはこれまであまりに物事を分割してしまったので、神をも多数の宗教に分割してしまつたのであ

る。ちょっとすわって考えてみれば、実際には創造主は決して分離されるべきものではないことがわかるだろう。神は、一、にほかならないからだ。

願わくば宗教界のリーダー全員が右の言葉で考え行動し、この世界に永遠の平和と理解をもたらさんことを！

私の友人である一牧師との会話で、われわれはあの雲のよりな宇宙船に乗ってキリストが帰って来る可能性について話し合った。相手はこの事は充分にあり得ることだと言う。彼は、黙示録に示されているように二千年後におけるキリストの再臨の予言を思い出したのだ。それには偉大なる力と栄光とをもって神の子たちが雲に乗って来ると述べてある。これによって私は一九六〇年にヨーロッパで発行された、聖書はやはり真実である、と題する書物を数年前に読んだことを思い出した。それによると「イエスの誕生日の綿密な研究の結果、天文学者達はイエスが実際にはわれわれのタイムスケジュールよりも六年先に生まれたのである」という。しかし何があつたのか、なぜそうなつたのかについて詳細な説明はされていない。私は自分自身の研究を行ない、或る興味深い事実を発見した。すなわちイエスはヘロデ王の時代に生まれたというマタイ伝に述べてある件である。ヘロデが紀元前四年に死んだといのは明確な事実であるが、イエスはヘロデの死去前に生まれたのである。ここで私はローマの修道士ディオニソス・エクシギウスがやつた一つの誤りを指摘したい。彼は六世紀にユリウス歴によって計算したが、算術があまり得意でなかつたので、少なくとも六年を一年と間違えたのである！これは明確な事実だ。イエスの誕生の際に空中に現われたシルシ、ベツレヘムの星は太陽系の三つの惑星の会合であつた。こ

の世界の大抵のクリスチャンは二千年の周期が終わるのを待っているが、実際にはそれは一九三九年の秋に終わったのだ。肉眼にはたゞ一個の異常に明るい星としか見えないこの完全な会合は、二千年の天文時間の始まりであつたのである。

ローマ製の歴が一九三九年十月から十一月を示しつつあつたあいだ、もつと正確な天文学的計算によって、それはタイムスケジュールに遅れること六十一年であつたのである。そこでわれわれは今年が二〇二八年という年になるのであり、一九六七年ではないことを知らねばならないのだ。

この事実だけでもわれわれすべてに考えさせる事柄を与えてくれるのである。そこでわれわれは歓迎しようとしている人―しかもわれわれが心底から歓迎しようとしている人―について再び考える必要があるのではないだろうか？ ―偉大な力と栄光とをもって、雲に乗って来る、神の子たち、について！

さて私の牧師たる友人との会話に返ることにしよう。しばらくのあいだ私は心中に疑問を持っていて、それを相手に確認してもらいたかつたのである。私は彼がきわめてオープン・マインドの持主であることを知っていたし、ゆえに次のような質問をすることをためらわなかつた。「大師が雲のような宇宙船の一つに乗って地球へ帰って来た時に、大師はどんな種類の歓迎を受け入れてくれるだろうか？ 他人を非難しないようにと教えたがっている大師が―。われわれはどんな種類の歓迎会を大師のために開いたらよいだろうか？」友人は私を見つめて答えた。「いや地球人は全く、非友好的な、歓迎を他の惑星から来た人たちにやってきたよ」

私は相手が言わんとすることを充分に理解できた。そして軍隊や

民間人が恐怖のためにこの友好的な人々に発砲した多くの事件を思ひ出した。宇宙人の宇宙船は地球のジェット機から追跡された。そして宇宙船に対抗する行為にかかわらず、相手の存在は依然として否定されているのである。相手に対する地球人の行動は決して慈悲深いとは言えない！ しかるに相手は真の救済者であるがゆえに、大師が「父よ、あの人たちを許してあげて下さい。あの人たちは自分が何をやっているかを知らないのですから」と言ったときに何を意味したかをよく理解しているのである。そこで私たち二人は、キリストが帰って来ることは至難のわざであるということに意見が一致したのである。そして大師の掃星は完全な秘密裏に行なわれるのであろうということにも考えが一致したのだ。

友人は言う。「へブル人への手紙一三・二にすばらしい説明があるよ。「旅人（宇宙人）をもてなすことを忘れてはならない。というのには、あなたがたの多くの人は気づかないで御使いたち（宇宙人）をもてなした（コンタクトした）からだ」（カッコ内は編者注）」「それは全くほんとうだ」と私は言った。「われわれは相手の正体や出身地に気づかないで相手をもてなしているかもしれない。その場合、相手は全く地球人と同じような姿をしているに違いない」友人はこのことを認める必要があった。実際そのとおりなのである。というのは人間にとって地理的なパターンは、広大な宇宙の中のあらゆる無数の惑星上でも同様であるからだ。人間は地球と同様だからだの大きさや皮膚の色で異なるにちがいないが、彼らはやはりわれわれと同じであり、地球人に生命を与えているのと同じ創造主によって創造され維持されているのである。

イエスの掃星の受け入れに関して私の心中に別な重要な考えがあ

った。

私は尋ねた。「もしイエスが現代人と同じヘアースタイルで、グリーの背広を着て、だれにも気づかれなくて地球人のなかを歩いて、しかも二千年前と同じように人間の平等さを教えるとしたら、大師に何が起ころうだろうか？」

「それはどういう意味だ？」と友は知りたがった。

私は続けた。「たとえ聖書のブドー園の物語を知っているだろう。一日のうち異なる時間にブドーをつみ取るために労働者がやとわれたのだ。しかるに彼らは夜明けにみな同じ金額の金をもらったのだ」

「ああ、君の言うことはわかるよ」と彼は言った。

「じゃあ、この特殊な平等の原理を教える一人間に対して、人々はどうしたらよいというのだ？」

友人は答える必要はなかった。相手が何を考えていたかが私にわかったのである。こんな原理を教える人はたしかに共產主義者と呼ばれるだろう。というのは私自身一般人にブドー園のたとえ話を話したあとで、こうした体験を持ったからである。

もっと話し合えると感じた多くの考えが心中にあったけれども、「とにかくコーヒーを一杯やろうじゃないか」と彼は言った。

コーヒーを飲んだあと私は続けた。「グリーの背広を着て髪を短かく刈ったこの見知らぬ男が、薬品もなく手術もしないで路上にいる病人を治し始めたり、盲目の人を再び見られるようにしたら、どうなるだろう？ その男がやった奇跡を人々は実際に認めるだろうか？」

「いいや、少数の人々を除いて、この社会はそんな能力を持つ人

をイカサマ師と呼ぶだろう」と友人は答えた。

私は言った。「それこそ私が知りたい事だったのだ。なぜなら、この世界の医学会は既成の機構や標準を固守するにちがいないからだ。彼らは医師や病院職員の名にかけて抵抗するだろう。そしてその見知らぬ男を即刻その国から追い払うだろう。その場合、運がよければ逃げ出せるだろう。というのは、みんなが男を捕えて裁判にかけるかもしれないからだ。過去においてすでに似たようなケースがあるのだからね」

男にとっては非常に難儀な状態になるだろうということ二人の意見が一致した。二杯目のコーヒーがすんでから二人は次のような決定的な結論に達した。それは、ここでもまた他人に援助の手を差し延べることが好きだったこのグレイの背広の見知らぬ男はあまり見栄えがしなかったということである。しかし一体われわれはこの種の援助を受け入れるだろうか。

今や読者は、彼は教会の中に少なくとも自分で選択した教会の中に避難することはできるだろう。これこそ私が最初に思ったことなのだが、私は別な工合に気づいた。まず第一に、もしイエスが教会を選んだならば（たとえばローマカトリック教会とすれば）他の宗教は何と言うだろう？ また彼がルーテル教会を選んだならばカトリック教会は何と言うだろう？ そのいずれもあらゆる解答を知っていると呼んでいる。

「わが教会へ来られ。そうすれば天国へ行ける」と教会は言ひ。世界的な統合がなくて分裂の存在しているこれらの教会へイエスが行くだろうか？ 儀式やドグマが教えられ、彼が二千年前にもたらした教えに対して口だけのサーピスが与えられている教会にだ。し

かも教会とはイエスが言ったような、父の仕事”をするために最も重要な事実が全然強調されなかった所だ。金があらゆる悪の根源であるにもかかわらず、イエスの御名のもとに巨額の金が集められて、産業界、株式市場、不動産等に投資している教会。恋人の宗教に合流しなければ結婚もさせてくれない教会。

おわかりのように、教会が統一されて真にイエスの原理を教えることを始めない限り、帰って来たイエスは宗教団体のどれにもつかないだろう。あらゆる宗教は統合し、共通の聖書を作り、科学の諸発見を受け入れるように心のドアを開く必要がある。自然の法則であり、創造主の行為を具体化する永久不変の因果の法則を教会が教えない限り、そして教会本堂内にいるあらゆる人が自然の法則に反するかわりにそれに従って生きようとしなない限り、キリストはこの世界に来るべき場所を見出さないだろう。

ゆえにそれは巨大な強力な教会ばかりでなく、一般大衆たるわれわれにもかかっているのだ。われわれは地球上に永遠の平和を確立できる。望みさえすれば！ これ以上無知の中に生きることがやめようではないか。利己的なプライドを捨てよう。自己の内部に宿る創造主を認めることにしよう！ それこそ人体を維持し、放蕩息子（エゴ）が父（宇宙の意識）の元へ帰って来るのを忍耐強く待っている、意識”にはかならない。この太陽系内の近隣の惑星群から来るブラザーズが差し出している援助の手を認めよう。そして彼らの知識を受け入れることにしよう。自我とうぬぼれのジャングルを脱出して真の意味における人間になろうではないか！

われわれは各自が重荷を背負い、地上で作り出した混乱を一掃しなければならぬことをみ知っている。それをわれわれに代わっ

て帰って来るキリストにやってもらうことはできないし、そうしてはならないことを知っている。わが家を訪れて来た友人にむかって昨夜の宴会の跡片づけをしてくれと頼むわけにはゆかない。宇宙人についても同様である。この世界でわれわれが作り出した混乱の跡始末を彼らに頼むことはできないのだ。

「私の言うことは正しいか？」と牧師の友人に尋ねた。相手は同意した。

不幸にして地球上の多くの人々は他人に対する責任という感覚を殆ど持たない。友は言った。「これはほんとうなのだ」

私は続けた。「もし教会がその多くの誤りを訂正するならば、一般大衆はあらゆる教会を大入満員にするために、そして坊さんたちを教師として信頼するために大挙してやって来ると思うか？ また各宗派が宗教的見地をふりかざすこともなく、世界平和、理解、人種平等などを目指すのに、教会の責任がより大であると思うか？

この世界で人間を自由にするのに努力しなければならぬのは教会だと思ふ。明日の恐怖から人間を自由にし、万物との真の関係を人間に見させないようにした神秘や迷信から人間を解放するためにだ」

「そう。それこそわれわれの仕事なのだ」と友人は言った。

二人は小さなディスカッションを終えて、友人は去って行った。

私はしばらくすわっていた。そして二人で話し合った多くの重要点を心の中で復習した。再度次のように言える。「近隣の惑星の人々は教えるために来るのであって、審きに来るのではない」

結局だれがわれわれを審くでもない。われわれが自分自身を審いているのだ。というのは、もしわれわれのエゴが他人に反抗的な事をやったとすれば、われわれの内部の意識（神）が、自分が誤

りをやった事、過失を修正しなければならぬことなどを、静かな美しい声で常にわれわれに知らせるだろう。われわれの内部を通じて働いている創造主（人間個人の意識）は、あらゆる仕事をやってくれるはずである。人間の利己的なセンスマインドがやってくれるのではない。これこそ放蕩息子すなわちエゴの心が父の家へ帰る唯一の方法である。この物語は聖書にあり、象徴的に述べてある。

宇宙からの訪問者は喜んでわれわれと一緒に建設的な事をやってくれるだろう。しかしわれわれにかわってやってくれるのではない。神はわれわれと共に働くだろうが、われわれにかわってやってくれるのではない。われわれが作り出したトラブルが大きくなるとき、われわれは自己の過失を修正してもらおうとして、神の手"にそれをゆだねようとするが、この偉大なる英知"によって助けられたいと思ふ人は、この援助が全くあり得ることを認めねばならぬ。その人は存在する万物に生命を与えている宇宙の力を信じなければならぬ。自分自身の内部を探求せよ。内部こそ最も容易に神を見出せる場所であって、神は遠い宇宙の彼方にいたり玉座にすわったりしているのではない。神は人間の内部に居るのだ。肉体は生ける神の神殿であるとキリストは言った。彼は知っていたのだ。われわれはこのことを認めねばならぬ。もしわれわれが最大の贈り物である、生命"が提供してくれる多くの天恵事を楽しみたければ！

宇宙的な理解力に対する真の探究者のために、十二課から成る、生命の科学"と、宇宙哲学"（いずれもアダムスキー著）を極力おすすめしたい。これらの文献は宇宙のブラザーズの生き方、哲学、自己発達の方法等に関する広大な知識を含んでおり、ブラザーズから地球人の代表たるアダムスキー氏を通じてわれわれに与えられた（八ページへ続く）

# 大阪支部大会、盛況裏に終了

日本GAP大阪支部結成一周年を記念し、東京本部より久保田日本GAP代表が来阪され、去る八月十六日大阪婦人会館において昭和四十五年度日本GAP大阪支部大会が開催された。当日はお盆と万国博が重なっていたにもかかわらず、会員の参加は予期していた以上であり、かつ本大会最初の話題は東京本部斎藤氏の富士山における円盤の8ミリ撮影成功の様子でありました。残念なことに斎藤氏直接の発表ではなく、数日前に来阪されて巽先生との質疑応答の様子をテープに録音されたものでありまして、全員一同一言一句聞きもらさじと耳を傾けていまして、テープ終了後しばらくは室中に余韻が残って、何か感動的なものが心の片隅に残留する思いが致しました。

すでに全会員が円盤の実在を信じ、むしろ今ではその人間性すなわち内面的哲学に移行している段階に、やはりこうしたカラーフィルムに依る撮影成功自体、単に円盤実在を証明するのみでなく、宇宙人の存在を証明し、かつテレビパシーの存在をも立証する貴重なる体験であったと思われまふ。我ら日本GAP会員を力づけるのみならず、唯物論者をも傾けさす事が出来るものと信じる。日本GAP全員が拍手をもって迎えたい気持であらう。

昼からは円盤スライドが上映され、その後各出席者自己紹介に移り、益々楽しさは倍化された。

そして久保田代表に対する質疑応答に入った。久保田代表は種々の質問に対し、質問の要点がつかめなかつた場合は要点を聞き直し、そして一言一句かみしめるようにして発言され、それは慎重の上にも慎重を積み重ねるものであり、そのため思わずしょうが隣席から「慎重ですな」と声を掛けてくる位でした。

或る質問の中でア氏からの手紙は全部公開済みなのでしようかと、何かア氏からの手紙を出しおしみるなど言っている感じで場内爆笑、そしてこの返答に御想像におまかせしなすと出てまたまた大爆笑する場面があった。また専門外の質問に対し、知らない事は知らないと明確に答えられる事自体から、久保田代表の人格をも推察され、まさしく機関誌第四十二号の編集後記に記載されている通り、一

宇宙問題は重要であるが、その前にまず大地に足をしっかりとつけ、現実の問題に対処することが肝要である」の徹底した態度で返答に臨まれ、小生ただただ信頼の念を深めるのみで御座居ました。遠路はるばる暑い中を来阪下さった久保田代表及び出席者の皆さん様ありがとうございました。近い将来またこの様な大会が開かれん事を祈って会合報告とさせていただきます。  
(塩原 勲)



前列むかって左より斎藤俊一司会者、市川宏大阪支部代表、久保田GAP代表、久世章業氏、重松昭春補佐。

(なお大阪支部例会会場は九月より変更された。詳細は32頁に掲載)



## 一編集後記

◎平素は皆様方の多大な御支援にあずかり、厚く御礼を申し上げます。先号は写真オフセット印刷にして喜んだのも束の間、再び資金難におちいり、やむを得ず編者みずから和文タイプを打ってネガオフセット印刷にしました。このため勤務先の公休を数日取ってタイプ打ちに専念しましたが、疲労の極に達して仕事はかどらず、機関誌発行の困難さを感じた次第です。労力は喜んで提供しますが、時間的余裕と体力に限界がありますので、タイプ打ちもすべて専門店へ依頼することが望ましく、そのためには資金を必要とします。よって皆様の援助資金は大いに歓迎致します。よろしくお願いいたします。

◎本号は目撃事件に主体をおき、海外の気味悪い目撃報告も数篇加えました。こういう事実もあるという意味で参考程度に掲載したものです。気軽にお読み下さい。庄巻は斎藤雄久君の体験記です。

◎来たる十一月八日(日曜日)には豊島振興会館で日本GAP総会を開催することになりました。今度は視聴覚資料の公開に重点をおいて、証拠物件を充分にごらんにいれます。アメリカ文化センター提供の「アポロ11号」、「12号」(カラー・16ミリ)は月着陸の実写映画で、興味深いものですが、斎藤君撮影の富士山上空円盤実写映画はすばらしく、本邦唯一の記録映画として貴重なものです。ふるって御来場下さい。

◎八月十六日の大阪支部大会は盛況裏に終了して関係者一同心から感謝しております。十四日夜若い諸君数名と共に東京駅を出発する頃から奇妙な事が起こり、十五日には久世長老の御案内で一同万博へ行きましたが、ここでも妙な事があつたりして楽しい旅でした。十六日の大会は出席者数二十四名で開催されましたが、終始熱気の溢れた真剣な雰囲気の中を終了しました。会場準備や編者の旅費工面に多大な御世話になりました市川大阪支部代表に厚く御礼を申し上げますと共に、運営にあたって御援助を頂きました斎藤俊一、川

池昭博、前原信行、重松昭春、久世長老の各氏、それに炎暑の季節のお盆という貴重な休日にもわざわざ御参加頂きました出席者全員の方々に深甚なる謝意を表する次第です。

◎大阪支部では毎月二回研究会が開催されています。出席者は少数ながらこれは驚くべき熱意のあらわれであり、特筆に値します。関西地区の方はふるって御参加下さい。東京でも月例会があります。

◎村雨光之助氏から次のような近況が寄せられました。「妹がGAPに入会したいとの事ですが、会費と入会金を御知らせ下さい。本誌の奥付を見ると頒価は書いてありますが、会費については出て居りません(注)頒価プラス送料イコール会費なのです。高電圧を発生させる本格的なソリッド・ステート・トランスフォーマーが完成に近づいてきました。もう一息です。アウフ・ヴィーダーシユライベン! 追伸。サールの物(宇宙船)は多少金がかかり過ぎますので、もっと本質的にすぐれた物を独自に作ります」(九月九日)

◎久世(くぜ)章業氏は京都の名門で元子爵、明治天皇侍従出仕という歴史的人物ですが、アダムスキー問題では非常な理解を寄せられ、編者は十数年前より御援助を頂いておりました。この久世長老が四国の吉岡武馬氏発明の碎石機を市販するための出資者を求めておられます。吉岡氏もかつてUFO研究の同志として編者とは旧知の間柄です。人物は保証します。出資者を御紹介下さる方は編者宛御連絡下さい。すぐれた発明を生かして下さい。

◎次号は十二月上旬に刊行の予定です。これも資金次第です。誌代切れの方には「誌代切れ」と記した紙片と振替用紙を同封しましたから、恐縮ながら早目に御送金を御願致します。購読中止の方は至急その旨を御一報下さい。(久)

## 会員募集

- \*申込次第案内書急送
- \*入会金不要。誌代三回分以上(送料共)納入にて可。
- \*総本部 米国カ州GAP

昭和45年9月30日発行

禁無断転載(不定期刊)

編集発行人 久保田 八郎  
発行所 日本GAP  
東京都江戸川区篠崎六丁目二二二  
電話 (六七九) 五三八六  
振替 東京三五九一二  
(久保田個人名義)  
頒価二〇〇・送料三五円

コスミック・ニューズレター 第43号